

★紹介コーナー No.1

「歴史を旅する」神奈川歴遊クラブ

NPO 法人・神奈川歴遊クラブは設立(2013年6月14日)から3年を過ぎ、4年目に入った。その名のとおり、NPO 法人組織で運営され、神奈川県を対象地域とする歴史ガイドをするクラブ(以降、会と呼ばせていただきます)である。理事長の小谷(おだに)英夫さんと副理事長の加藤健一さんに、お話を伺いました。



神奈川区の権現山で解説する加藤さん

歴史に魅了された県歴博のガイド経験者のその後の活動として

現在、会員は20名で、中心メンバーは神奈川県立歴史博物館でボランティア・ガイドの経験をされた方たち。ガイドの任期は5年で終了となるが、そこで得た知識やガイドの経験をその後もさらに活かしたいと活動をはじめ、NPO 法人・神奈川歴遊クラブを立ち上げたそうだ。面白いことに、小谷さんも加藤さんも、歴博のボランティア・ガイドに応募したのは、歴史以外の興味からで、小谷さんは浮世絵、加藤さんは仏像を、思う存分見られたら、とガイドになったが、この仕事をやっていくにつれて、いつしか歴史に深い興味をいだくようになったとのこと。

一般的に各地にある郷土史研究の会は、戸塚区なら戸塚区だけ、広くても鎌倉市だけといった地域限定が多いが、会の対象地域は神奈川県全体であり、これまでの活動を見ると、横浜はもちろん、鎌倉、小田原、箱根などにも及び、歴史ガイドの会としては非常に広範囲な地域をカバーしている。また、これまでに神奈川県にある9つの東海道の宿場をすべて回り終え、6月23日には、東京都の品川宿にまで出かけて行った。神奈川県境を越えてはいるものの、東海道は続いているので、もっと先へという参加者の声があるためである。(これまで回った場所については会のサイト「歴史を旅しよう！神奈川歴遊クラブ」をご覧ください)

歴史を追求し、実証する

会としては、漫然とした歴史散歩ではなく、テーマとストーリーを持って深く歴史を追求し、その実証のために現地を歩くというスタンスに立っている。コースによっては同じ場所に何度か行くこともあるが、テーマが違うのであれば、別のストーリーになるので、新しい発見や見方ができると考えている。このテーマとストーリー方式によって、会員はもとより、リピーターが多いことから参加者も高い満足を得ていると確信している。

基本的に、コース参加者は指定の駅に9時30分には出発できるように集合し、参加費500円(資料代、保険込)を支払い、受付を済ませ、班に分かれて出発する。各班、参加者定員15名で、ガイド役と最後尾で安全確認する役目の会員2人に対応する。ふつうは3班、参加者45人だが、希望者が多いときは4班になることもあるし、それ以上の人数になる時は追加の日程で行われることもある。ほぼ毎月催行されている。参加希望者は、メール、ファックス、はがきなどで申し込む。先着順なので、人気のあるコースは定員オーバーで断られることもあるので、早めに申し込むことをお勧めする。今後の日程は当サイトの「ホーム」のイベント情報欄に掲載します。(今後の日程は右側の〈歴史仲間の予定〉に掲載)



野毛の旧平沼専蔵邸の石積擁壁で

顧客満足度アップを目標に

会では、半年ごとに次の計画をたてる。会員それぞれが興味のあるものを提案し、話し合いによって次の半年分の計画や日程が決められる。実施決定となれば、コースの下見には最低2回は行くし、リーダーによる資料作りとその後のすり合わせなどもあって、日々かなり忙しいという。

会のめざすことは、顧客満足度をあげること。対象となる顧客は、例えば、プラタモリ(NHK放送のタモリが地域の歴史を探訪するテレビ番組)を好んで見るような歴史や地域などに関心のある人たちだ。参加者が住所・氏名等を登録すれば、その後半年分の日程を記したダイレクトメールが送られて来る。現在は250名に郵送されている。この会では、会員といっても、参加者とは違い、ガイドができるレベルを求

めているので、ハードルは決して低くはない。NPO 法人とした理由は、真剣に歴史研究及びガイド事業に取り組んでいる姿勢を示し、対外的な信用度を上げ、交渉をスムーズに進めやすくするため、また健全で明解な会計のためとのことだった。観光業者からの引き合いもあるが、単なる歴史の地を歩け歩けするだけのツアーではない、歴史のテーマ追求型の企画とならないなら、受ける気はないとのことだ。こうしたことにも、神奈川歴遊クラブの歴史への熱い思いと、活動への真剣な取り組み姿勢が感じられた。

聞き手より: 歴史仲間から、「こういうのがあるよ」と口コミが入ったのが、昨年の9月の催行された「追跡！生麦事件」だった。たまたま友人が生麦事件の研究発表をした直後であり、タイムリーだったこと、またそのキャッチコピー「追跡！生麦事件」が気に入ったこともあって、それが初めての参加となった。お話を直接聞いて分かったことは、小谷氏によると、生麦事件に強い関心があることから、これまで毎年、生麦(事件)を取り上げていられるということだった。何と云っても生麦事件は日本の歴史のターニングポイントだったのだから、深い思い入れがあり、会員の皆さんたちはその重要性を伝える使命を感じていられるに違いない。同じ地を何度訪れても、歴史には新たな感動を呼び起こす力があるのだろう。(聞き手、渡辺登志子)